市民文芸

短歌

令和七年度
第五十四回阿南市秋季短歌大会　選

入選

過疎の村案山子が集ふバス停に峠を越へてネコバス来る　谷本　良裕

しぶき雨三和土を打てば生ぬるく人肌に似た匂い漂う　西條　悦子

亡き夫がデイにて作りしミニ団扇あおげばやさし青き風吹く　紅露　勝子

初生りのキュウリ三本ぶらさげて夫は吾に笑顔呉れたり　吉形　和恵

高台に人の住む灯を見て暮らす妻と出会いしこコヨコハマに　弘明寺　昭

朝まだき過疎の駅にて日傘さす足は草履の案山子の夫妻　横山みつ枝

トンネルを抜けると見える人造湖多くの民の人生変えて　森尾　光一

血管の細きは看護師泣かせなり額にうっすら汗にじむまで　木内　照代

年金の不足分だけ働いて夢とは違う老後を生きる　弘明寺　昭

あじさいを微かに揺らす風がくる亡母の立ちし一坪の庭　竹田　雪湖

刈り取りを終えし田んぼに処暑の風株の香のせて吹き渡りくる　井坂　稔

夏祭りに浴衣を着せて蝶結び十七歳はうすく紅さす　里和倭己子

初生りのイチジク亡夫に半分こ出会いし頃のよ甘さひかえめ　宮﨑喜美子

俳句

阿南市俳句連合会　選

藤咲くや娘十五の片えくぼ　張本　雅宣

花吹雪怒りと慈愛仁王の眼　石井　政子

筍の転がつてゐる獣道　鎌田　黄鳥

老いも児も見かけぬ里や桜咲く　廣浦　保子

初桜父の遠忌の日を決めり　陶久　晴義

三椏の花標識照らす峡の道　中富はるか

裏山に獣の気配月朧　近藤ヤス子

春の駅言えないままに遠ざかる　東明　陽子

うららかや小鳥の声のにぎやかに　多田紀久代

桜舞い生の焦燥遠く去り　森　伸

川柳

阿南川柳会　選

ほころびた愛を繕う針がない　神野　鈴代

鉄道のガタンゴトンが子守歌　佐藤つたえ

シニア会二十才に戻る青春歌　篠原　良子

手袋で拝むていどの願い事　西田　修身

何故なぜとまたも誤作動脳の乱　野村　敏子

ハイと言う返事で貴方支えてる　若木アヤ子

車窓から眺めるだけの花遍路　渡邉ろまん

一般応募

ほろ酔いの舌が本音を喋り出す　島尾美津子

汚れても校歌の川は清いまま　泰地　重美

呆けぬよう脳トレ漬けで日が暮れる　武田　敏子

漢詩

阿南漢詩研究会・青松吟社　選

角力（すもう）　田中　公

瞬時激突丈夫褌
發氣揚揚押又援
奮迅輕軀顚巨漢
滿場拍手嘆聲繁

瞬時の激突　丈夫の褌
発気揚揚　押して又援く
奮迅の軽躯　巨漢を顚ばせ
満場拍手　嘆声繁し

小松島中旧庭球部生との再会　松原　伸夫

久闊六旬為約盟
庭球師弟笑相迎
当時校長共筵席
寿福愈深故旧情

久闊六旬　約盟を為し
庭球の師弟　笑って相迎う
当時の校長　筵席を共にし
寿福愈深し　故旧の情

梅天閑詠　増喜　泰典

連日梅天緑長陰
柴門懶出獨沈吟
案頭眼倦閑房裏
煮茗幽香午景深

連日の梅天　緑陰を長ず
柴門出づるに懶く　独り沈吟す
案頭　眼は倦む閑房の裏
茗を煮る幽香　午景深し